

自主シンポジウム

国家を支えるアクティブシニア

司会・登壇者 占部慎一（シニア学びと活性化プロジェクト委員長）
登壇者 多田哲雄（シニア学びと活性化プロジェクト委員長、チェリー傾聴の会）
登壇者 鈴木好子（シニア学びと活性化プロジェクト会員、さざんか傾聴の会）

「シニア学びと活性化プロジェクト」

(SLAP) の姿勢 g

①高齢者に対するステレオタイプな見方、捉え方を越えて、アクティブに生きる。

高齢者は、過去にこだわり変化を嫌う、生産的な仕事は不可能、病弱であるなどとステレオタイプに捉える認知が一般化している。が、実は個人差が大きくステレオタイプに捉えるのは誤りである (R. バトラー 1998)。現代では多くのシニアが積極的に運動で身体を鍛え、メディアや Web から健康によい食生活を学ぶ共に健康なライフスタイルについても学び実行している方が多い。

これらの方々から学び、連携して高齢者になっても社会に参画・寄与し幅広い分野で活躍することを目指している。

②伝統的な3ライフステージ論（教育—就職—定年）を脱し、多様なライフステージづくり、新たなアイデンティティ探究、新たな文化創造などを実践し、実践する人々を支援する。

定年—隠居—孫の世話—晴耕雨読という伝統的かつ直線的・単線的なライフステージ観に寄りかかるのではなく、新たなやりがい、生きがいをもとめ自己を活かせる新たな探求やエクスペローラを行い (L. グラットン 2017)、他の人々や研究会・学会や法人や企業や自治体等とも連携していく。

③超高齢化社会に必要な制度、システム等を他研究機関や自治体、行政と連携して提言し実現していく。

日本は工業立国の国であった。このため活動的な成人男子が仕事がしやすいように多くの制度、システムが作られている。全人口の1/3を占めるシニアも他の世代の人々と共に豊かに過ごせる社会へと暫時変容していく必要がある。

④高齢者は様々な経験をして来ている。例えば、失敗や挫折、裏切りや足の引っ張り、見栄や妬み、病気や治療、大切な人との別れ、自己実現のためのストイックな忍耐生活と探究など様々である。しかし、それらを乗り越えて生き朗らかに過ごしているのである。この経験を叡智として、世の中で困っている人々のために役立てることが大切である。

子どもの7人に1人は貧困であり、高齢者の5人に1人は貧困である。また40歳から64歳の引きこもりは60万人である。シニアが手を組み組織を創れば多くの人々が救われるに違いない。

⑤日本は世界一の長寿高齢化社会である。その困難を乗り越える工夫や方法や創造や文化は、これから高齢化社会に突入していく先進国、後進国が吸収したい宝の山である。

我がプロジェクトは、国内向けの刊行だけでなく、Webで世界に情報を発信し、世界の人々とも連携していく所存である。

会場討論

日本が直面している以下の問題は、どのような人々が、どのようにすれば乗り越えることが可能か考えてみてください。テーマは、グループ毎に決めてください

[ツーループ回路で、考えを外化して周りの人と相談してください]

1. 社会保障費の増大

補てんするためには、人口が少ない若い世代の課税負担を増やす必要がある。また、原資不足から、将来年金が減額するはやむなしの状況である。若い世代は課税負担の増大と年金の減額という2重の苦しみを背負うことになる。

2. 老後資金不足問題

金融庁金融審議会は「夫婦そろって65歳から30年間生きると、老後資金が総額で2000万円不足する」との試算を発表した。また、某銀行は4000万円が必要とする試算を発表している。年金以外にこの額に充当する貯蓄もしくは収入を確保できるか否かが生活の質を分けることになってしまう。

3. 労働人口の減少

現在労働力率は60%弱であるが、2030年には848万人の労働力不足となり、労働力率は55.5%に減少する。当然GDPが低下し社会システムやインフラの劣化が進み失業・貧困が増大する。

4. 貧困、引きこもり

現在、子どもの7人に1人は貧困、高齢者の5人に1人は貧困である。しかも内閣府によれば、40～64歳のひきこもりは61万人である。人口の多い65～75歳の高齢者層も勘案すれば、その数は容易に100万人を越える値になるはずである。また、ひきこもる中高年の子と高齢者の親が社会から孤立する「8050（はちまるごーまる）問題」は深刻な状況で、殺傷事件などが頻発している。